

# 初期ユダヤ研究における清めと汚れ

著者	大宮 有博
雑誌名	名古屋学院大学論集 言語・文化篇
巻	27
号	2
ページ	139-148
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000667">http://doi.org/10.15012/00000667</a>

〔研究ノート〕

## 初期ユダヤ研究における清めと汚れ<sup>1)</sup>

大 宮 有 博

名古屋学院大学商学部

### 要 旨

本稿は、メアリー・ダグラスの *Purity and Danger* ([1966] = 日本語訳題『汚穢と禁忌』[1972] 刊行以降現在までの初期ユダヤ研究における清めと汚れの研究の動向を、ニューズナーとクラウンズに焦点を置いて批判的に検討する。両者は汚れと罪の関係に着目する。同様の動向は新約聖書学の清めと汚れ研究にも見られる。

キーワード：清め、汚れ、旧約聖書、新約聖書

## Review: Purity and Impurity in the Early Judaism

Tomohiro OMIYA

Faculty of Commerce  
Nagoya Gakuin University

---

1) 本研究はJSPS科研費15K02425（課題名『新約聖書のなかの差別と共生—ルカによる福音書の「罪人」テキストの社会科学的解釈』）の助成を受けたものである。

発行日 2016年3月31日

## はじめに

今年にはメアリー・ダグラスの*Purity and Danger* (1966) = 日本語訳題『汚穢と禁忌』(1972)<sup>2)</sup>が刊行されて50年を記念する年である。本書が文化人類学の領域において金字塔とも言える重要な業績であることは言うまでもない。また、ダグラスの汚れの理論は人類学を超えて、ユダヤ教、ゾロアスター教、イスラム教といった宗教学、民俗学、歴史学など幅広い学問領域で援用されている。とりわけこの書物の中で清めと汚れの構造を示す例としてレビ記の食物規定を扱っていることから、初期ユダヤ研究や聖書学の領域でも早くから注目されてきた。ダグラスがこの書物の中で示した清めと汚れの理論は、新約聖書学ではイエス時代のユダヤの社会構造を明らかにするために積極的に援用された。それに対して初期ユダヤ研究では、主にラビ文献を解釈するにあたって批判的に援用された。

本稿ではまず、ダグラスが*Purity and Danger*で明らかにした清めと汚れの図式がこれまで受けてきた批判をまとめる。その上で本書が、イエス時代のユダヤ教研究や新約聖書研究にどのようなインパクトを与えてきたかを、ジェイコブ・ニューズナーとジョナ

サン・クラウンズを軸に検討する。

## 1. メアリー・ダグラスにおける汚れと危険の論理

メアリー・ダグラスが*Purity and Danger*で提起した清めと汚れの観念は以下のようなものである。人間は物・時間・空間・人間を分類し、体系化し、構造化している。このような分類には必然的に、その分類の境界に存在するものや、異形のもの、秩序を乱すものが存在する。このような境界的・異形的存在は汚れと見なされ、危険なものとして扱われる。それに対して聖潔(sacred)とは秩序である。そしてそれは、個人および種の統一・完全性・完璧性である(Douglas 1966: 55)。「完全であり一つであること」である。言い換えると、あらゆる時代や地域の文化に見られる汚れには、こういった「場違いなもの」「無秩序」という共通の本質がある。

ダグラスにとって、汚れは「プリミティブな」社会から現代社会を一貫したシステムである。汚れのあるところにシステムがあり、そのようなシステムの中に汚れは「場違い」として存在する(Douglas 1966: 29-40, esp. 35, 40)。その汚れのシステムは、人間の肉体によってアナロジーに表現される。

人間の軀によって表わされる象徴体系は一層直接的である。肉体はいかなる有限の体系をも表わし得る雛型となる。つまり肉体の境界は、危険もしくは不安定なあらゆる境界を象徴し得るのである。また肉体は複雑な構造を有している。従って肉体のさまざまな部分が持つ機能やそれらの部分の相互関係は、他の複雑な構造を表わす

2) 原題*Purity and Danger*を直訳すると『清浄と危険』とするべきである。しかし本書は『汚穢と禁忌』という日本語題がつけられた。また本書を出版したのは、当時詩の本を出していた思潮社であった。その理由として中沢は、この本は当時の閉塞した70年代の日本の文化に風穴を開ける理論を提供するものと期待されていたことを挙げる(参照：中沢新一による文庫解説、ダグラス 2009: 426)。本稿では*Purity and Danger*と原題表記とする。

象徴の源泉となり得るのであろう。肉体の中に象徴を見ようとしてなければ、そしてまた、社会構造に内在すると信じられている能力や危険が凝縮して人間に肉体に再現されていると見なければ、排泄物、乳、唾液等にかかわる祭式を理解することは不可能なのである。(Douglas 1966: 166 = ダグラス [1966] 2009: 269-270)

このように見た時、肉体の開口部が傷つきやすく、そこから漏出されるものは汚れの特徴を持つものである(大便、尿、乳、唾など)。軀また、から剥落したもの(皮膚、爪、汗、毛髪など)も同様である。このことから連想すると、社会の周縁部も傷つきやすく、そこから漏れ出るものも汚れの対象となると言える。(Douglas 1966: 122)

また、ダグラスは汚れと道德の関係について、*Purity and Danger*の8章で論じている。彼女は汚れの規範と道德の間に直接的な対応関係を認めていない(Douglas 1966: 130-131)。何が汚れていて避けなければならないものかは、その文化にとって明確である(Douglas 1966: 132)。それに対して道德はあいまいで、社会的制裁を受けないまでも清めの儀式を要することがある。

さらに汚れは社会をコントロールする力強いツールでもある。汚れは社会行動や性行動をコントロールする(9章)。このシステムは、女性や特定の社会階級を引き下げる働きがある。(もちろんこのような働きは、複雑な構造を持つ。)

ダグラスの*Purity and Danger*はこれまで多くの批判を受けてきた。よくある批判の一つは、ダグラスがあらゆる文化に見られる「汚れ」に共通の本質があるとする立場に対する

ものである。インドのカースト差別を研究する歴史学者小谷汪之は、ダグラスは*Purity and Danger*冒頭に「周知のように、汚穢とは本質的に無秩序である」と述べているが、ダグラスがその根拠を示していないと批判する(小谷 1999: 27)。小谷によると、このようにダグラスの理論は、あらゆる汚れには「共通の『本質』があるということ」を先験的に仮定することに成り立っているものであり、この先験的な命題を疑われたならば、成立の根拠を失ってしまうものなのである。」(小谷 1999: 32)

また、本書においてダグラスが「場違いなもの」あるいは「境界的なもの」を汚れの本質とするのに対して関根康正は、「変則的で無秩序な現象の大部分はケガレを生み出さない」(A. S. Meigs)のであって、むしろ「腐敗していくことの知覚」こそがケガレを生み出すと主張する(関根 26-27)。その上で関根は、〈境界性(場違いなこと) + 死にゆくことの隠喩(他界性の突出) = ケガレ〉という等式を提案する(関根 1995: 27)。さらに波平は、ハレ・ケ・ケガレには民間信仰に一つの体系を与える重要な分析概念ではあるが、ダグラスのようにケガレの観念を論じて、「『もとの意味』や『本来の意味』を求める必要はない」と主張する(波平 [1985] 2009: 44)。波平にとってこのケガレを「分析概念」であって、ケガレ観そのものを示す語として用いるのではない(波平 [1985] 2009: 41)。

ユダヤ学の分野からは、*Purity and Danger*の2章で展開された旧約聖書に見られる食物規定に関する禁忌と汚れについての分析は、後に激しい批判を受けることになった。それらの批判についてダグラスは、2001年の本書ラウトレッジ版の前書きにも明らかにし

ている。また *Purity and Danger* の30数年後に出版された *Leviticus as Literature* (1999) において、彼女自身が自説を大幅に修正した。*Purity and Danger* でダグラスは境界を維持することや異質なものに対する恐れがどの社会にあると述べていたが、*Leviticus as Literature* では大きく後退した。またダグラスはレビ記の清めのシステムがアフリカやインドのそれと類似していると *Purity and Danger* で述べていた。しかし、*Leviticus as Literature* では中国やギリシアの科学との比較を試みるものの(2章, 3章)、清めのシステムを普遍的なものとする主張はもはや見られない。

さてユダヤ学のアイルバーグ＝シュヴァルツは *The Savage in Judaism* (1990) の中で、身体を社会の鏡とする考えが十分ではないことを指摘する。もし社会の境界が破られることに対する恐れが体液の漏出に対する恐れに反映されているのならば、あらゆる体液(唾液や涙、小便など)が汚れの対象となるはずである。しかし古代イスラエルの法は特定の体液だけ(血液、精液)が汚れの対象となるかを説明していない(Eilberg-Schwartz 1990: 179)。アイルバーグ＝シュヴァルツは、体液の内汚れに関連するかしないかの違いは男/女、生/死、秩序/無秩序の違いを暗示していると主張する(Eilberg-Schwartz 1990: 179-181)。またアイルバーグ＝シュヴァルツは、ダグラスの身体を社会の鏡とする考え方はイスラエル社会と非イスラエル社会との間については説明できているが、イスラエル社会内部の関係(社会階級、男性と女性など)については十分に説明できていないことも指摘している(Eilberg-Schwartz 1990: 189)。

このように *Purity and Danger* は数多くの批

判やダグラス自身によるテーゼの修正があるものの、古代社会に見られる清めと汚れの感覚が、日本も含めてあらゆる文化において形を変えながら存在を指摘したという点において今もって高く評価されるべきである(波平[1985] 2009: 306-307)。また、*Purity and Danger* は今もってユダヤ教の祭儀や法を研究するための全般的方法論を提供するという点で重要な書物である(Klawans 2003: 24)。しかし、これまでの研究は、清めと汚れの概念はそれぞれの文化においてヴァリエーションがあることを指摘しており、ダグラス自身もその点を受け入れて旧約聖書レビ記研究を *Leviticus as Literature* で展開している。第二神殿時代のユダヤ研究においても、その点を留意しながら研究を進めていく必要がある。

## 2. ジェイコブ・ニューズナー

ジェイコブ・ニューズナーの *The Idea of Purity in Ancient Judaism* (1973) は、ダグラスが *Purity and Danger* で提供した清めの体系を古代ユダヤ教とりわけラビ的ユダヤ教に援用する試みである。従って巻末にはダグラスによる応答が寄せられている。また本書の焦点はラビ文献に置かれているが、本書1-2章は旧約聖書および第二神殿時代の文献にも十分な分析を加えている。本稿は主に *The Idea of Purity* 1-2章について論じる。

本書の冒頭でニューズナーは、清めと汚れは(神殿に入れるかに関わる)「地位」(status)であると述べる(Neusner 1973: 1)。またニューズナーは後述のクラワンズと違って、清めを祭儀的なものと道徳的なものに2分するという考え方を否定する。なぜならば、清めと汚れは、聖書時代からタルムードが書か

れた時代までの日常生活の具体的な問題を扱っているからである。

ニューズナーの重要な主張は、次の2つの点に要約できる。第1に清めと汚れは専ら祭儀上の事柄である。旧約聖書の律法に出てくる汚れの例 (ex. 流血の女性や皮膚病を患う者、かびのついた家) はいずれも、非道徳的行為 (悪行) とは関係ない。第2にこの清めと汚れは、主に性・偶像崇拜・不道徳な行為にまつわる道徳的・宗教的行動のメタファーとして働く<sup>3)</sup>。この清めと汚れのメタファーに結びつく具体的な意味として、ニューズナーは以下の4点を挙げる (Neusner 1973: 13-15)。(1) 汚れは神を拒絶することであると同時に、神に拒絶されることである<sup>4)</sup>。(2) 偶像は汚れである<sup>5)</sup>。(3) 清めとは道徳的に非の打ちどころがないことを示すしるしであり、汚れとは性関係に関連して入り込む道徳的悪のしるしである (創世記34: 5-13, エゼキエル24: 11)。(4) 土地はそこに住む民の悪い行い (とりわけ偶像崇拜) によって汚される (エゼキエル36: 18; 36: 33)。

ニューズナーは祭儀に関する清めの規則について述べる祭司文書と、道徳的罪の問題を扱う際に清めと汚れに関する用語を用いる預言文学や知恵文学、歴史書の間に対応関係があると主張する。汚れと道徳的罪とを結びつ

ける結合点は、汚れた人々に用いる法的用語にある。

清めの概念がイスラエルの歴史においてどのように変遷したかについて、ニューズナーは次のように述べる (Neusner 1973: 27-29)。まず清めと汚れの概念は祭司文書を編纂した祭司カーストの中で形成された。清めと汚れのマイクロコスモは、祭儀・祭司制度・神殿に焦点を置いて、以下に日常生活が祭儀に関連しているかを示している。第二神殿時代になると、神殿の権威に挑戦するセクトも登場し、クムランの様に祭司制度や神殿を拒否する閉鎖的集団も現れた。このように第二神殿時代になると清めと汚れに関する考えが具体的な神殿の存在から離れていったものの、清めと汚れは社会的善と悪のメタファーを提供する。第二神殿の崩壊 (70年) 後、生理や食物に関する規定は日常生活に大きな影響を及ぼすようになったが、神殿に入ることとはこの清浄の規定を順守する理由にはなくなった (Neusner 1973: 32)。こうして神殿が崩壊してから3世紀までの間に、清めのメタファー的な用法が一般的なものになった。

新約聖書に見られる清めについてニューズナーは、キリスト教はクムランと同様にエルサレムでの祭儀と神殿を批判したと述べる (Neusner 1973: 58-59)。キリストの十字架は最後の犠牲であり、神殿は教会に置き替えられた。まずパウロは食物と性に関して清めと汚れの象徴を用いて教える。食物はもはや人を汚すものとはならないが (ローマ14: 14-23; 1コリント6: 12-13; ガラテヤ2: 11)、性的罪は人を汚すものであった。

共観福音書に関してニューズナーは、(1) 重い皮膚病、(2) 食前の手の清めと食物、(3) 道徳の3つの点を清めの概念を用いて検

3) 清めと汚れのメタファーの用法としてニューズナーは、イザヤ66: 20; 66: 17; 歴代誌下30: 18-19を挙げる (Neusner 12)。

4) イザヤ35: 8, エレミヤ33: 8, エゼキエル14: 11; 20: 26, 哀歌4: 15, ハガイ2: 11-14。参照: ゼカリヤ3: 5

5) 創世記35: 2, ヨシヤ王の清め (列王記下23: 8-16=歴代誌下34: 3-8), エレミヤ2: 23; 19: 13, エゼキエル23: 30; 36: 25



討する。マルコによる福音書は、イエスが出血の止まらない女性（マルコ 5: 24-34）と皮膚病を患う者（1: 40-44）とに触れたのに汚れたとは述べていない。また、過越祭のためエルサレムに入る前に皮膚病を患うシモンの家に泊まっている（マルコ 14: 3）。ニューズナーは、福音書編者は「皮膚病を患う者」という語をシモンの以前の状態としか見ていないと述べる（Neusner 1973: 61）。しかし、「出血の止まらない女」についてニューズナーは言及しない。次にイエスはファリサイ派の主張する食前の手洗いの慣習と清い食物と汚れた食物に関する規定は無視するが、それとは対照的に人間の心の中にある汚れは激しく非難する（マルコ 7章、特に 19-22節; Neusner 1973: 61）。

ニューズナーの主張——（1）清めと汚れは祭儀上の事柄である。（2）この清めと汚れは道徳的・宗教的行動のメタファーである——に対してメアリー・ダグラスは、汚れに関する聖書の議論（祭儀に関するものメタファー的なもの）がすべて単一の象徴体系の一部であると主張する（Douglas in Neusner 1973: 140）。神殿の規則、性に関する規則、そして食物規定は単一の例えの体系である。それ故にそれらの組織的相関関係においてそれらの規則は、道徳全体と物理的宇宙を同時に維持している。しかしダグラスは罪の人を汚す力と身体からの漏出が人を汚す力とが異なるものであるところまでは述べていない。

### 3. ジョナサン・クラワンズ

ジョナサン・クラワンズの *Impurity and Sin in Ancient Judaism* は、清めと汚れの

図式を援用した初期ユダヤ研究の分水嶺と言える。本書においてクラワンズは、Adolf Büchlerの古典的著作 *Studies in Sin and Atonement* に大きく依拠し、Neusnerの *The Idea of Purity in Ancient Judaism* に対して批判的な立場を展開している。

本書の主旨は、古代ユダヤ文献（旧約聖書～ラビ文献）において清めと汚れが指示する対象は、祭儀的なものと道徳的なものに分けることが出来る。そして、祭儀的汚れは感染するが、道徳的汚れにはそういうことはない。また、ニューズナーが汚れを罪のメタファーとすることを批判し、道徳的汚れ（＝罪）はリアルなものであると主張する<sup>6)</sup>。

旧約聖書とりわけいわゆる祭司文書（主にレビ記 11-15 章、民数記 19 章）の言う祭儀的汚れは、出産や死、性器からの漏出といった日常生活において、避けようとするものの出来ないものである。祭儀的汚れが生じた者は、一時的に地位が落ち、神殿の聖所に入ることや祭儀に参加することが禁じられる。しかしこの汚れは一定期間を経た後に、清めの儀式によって清められる。

それに対して道徳的汚れは、神聖法典（レビ記 17-26 章）によると、性的不品行（18: 24-30）、偶像崇拜（19: 31; 20: 1-3 など）、流血（民数 35: 33-34 など）といった行為によって引き起こされる。この道徳的汚れは、罪を犯した人自身、聖なる地（すなわちイスラエルの地こと）、聖所を汚す。

祭儀的汚れと道徳的汚れの間には、いくつ

6) ニューズナーの汚れを罪のメタファーとする立場は H. Ringen, B. Levine, B. Schwartz によって支持されている。またクラワンズと同じ立場を取るの J. Milgrom, D. P. Wright である。

かの違いが見られる。(1) 祭儀的汚れ自体は罪ではないが、道徳的汚れは罪を犯した結果である。(2) 祭儀的汚れは接触によって感染するが、道徳的汚れにはそのような感染はない。(3) 祭儀的汚れは一時的なものであるが、道徳的汚れは永続的である。(4) 祭儀的汚れは清めの儀式によって清められるが、旧約聖書には道徳汚れを清める儀式についての記述はない。むしろ罰・贖い・非道徳的行為をやめることによって、道徳的清めは達成される。(5) 用語上の相違も見られる。「汚れた」(טמא)は祭儀的汚れ・道徳的汚れの両方の文脈において用いられる。しかし、「いとうべきもの」(תועבת)と「汚すもの」(תנף)は道徳的汚れに用いられるが、祭儀的汚れには用いられない。これらのことから、祭儀的汚れと道徳的汚れの区別は明らかであると、クラワンズは主張する (Klawans, 2000: 26)。

第二神殿時代になると道徳的汚れの規定が加えられるようになる。エズラ記・ネヘミヤ記ではユダヤ人男性が外国人女性と結婚していることに対して汚れを指す言葉を用いて強く批判する<sup>7)</sup>。多くの研究者がエズラ記・ネヘミヤ記が外国人女性との結婚を祭儀的汚れと理解していたとするのに対して、クラワンズはこれを道徳的汚れ(=罪)と同定する (Klawans, 2000: 44, 177n3)。第二神殿時代の文献は、この罪によってイスラエルが再び聖なる土地から追われることがないように警告する。また、性に関する罪にイスラエル人が関与することで、聖所を汚し、その結果、再び聖なる地から追放されるという考えがこの

時代に定着した<sup>8)</sup>。

ところでクムランで発見されたセクト文書は、祭儀的汚れと道徳的汚れをさほど厳密に区別していない。クムランのセクト共同体の成員で罪を犯した者は、祭儀的汚れを他に感染させる源となると見なした。また、彼らにとって外部者(セクトに属していないユダヤ人も非ユダヤ人も含む)は罪深い行いの故に祭儀的に汚れている。そのため彼らはユダヤ人も非ユダヤ人も混ざった社会から物理的に隔絶された共同体を形成したのである (Klawans, 2000: 80-82)。

クムランのセクト文書が祭儀的汚れと道徳的汚れを混同するのに対して、ラビ文献は祭儀的汚れと罪を分けている。「ミシュナ」『ケリーム』1: 1-4の汚れの原因とその汚れの影響を段階づけた一覧が記されている。ここに示されている汚れの原因を日常生活で避けることは難しい。それに続く『ケリーム』1: 6-8では、神聖さが10段階に分けて示されている。ここには汚れが他人に感染する可能性と祭儀的に汚れた者が神殿から排除されることが記されている。しかしクラワンズはここに示されているものが、清めに基づいた神殿からの排除規定でもなければ階級のような序列でもないと主張する。なぜならここに示される排除は祭儀的清めの制度に直接関係しておらず、清い状態にあるならば男も女もユダヤ人も非ユダヤ人も神殿に入ることを容認されているからである。『ケリーム』1: 1-8に示されているのは、祭儀的に汚れた人が清浄を保たなければいけない人(ex. 神殿に入ろう

7) 外国人女性との結婚を「汚れ」の用語を用いて批判(エズ6: 21; 9: 1, 11-14)、外国人の妻と離婚することを『清め』の用語で勧告(ネヘ13: 30)。

8) Klawansはダマスコ文書(CD)や「寝ずの番人の書」、「十二族長の遺訓」を例として挙げる (Klawans, 2000: 59)



とする人や聖なる食事を食べようとする人)を汚さないための制度である。

クムランのセクト文書とラビ文献の間の違いは以下のように整理される。クムランのセクト文書は、祭儀的汚れと道徳的汚れの双方を回避するための厳格な制度を示している。クムランの成員は祭儀的汚れと道徳的汚れを同じものと見なしており、それ故に罪人は祭儀的汚れの原因になるとも考えた。それに対してラビ文献には祭儀的汚れと道徳的汚れを厳密に分け、前者を分けるための詳細な規定を設けた。

クラウンズは、祭儀的汚れと道徳的汚れの区分することが新約聖書においてどのように適応されるかについて十分なページを割いて論じる。ここで彼はE. P.サンダースやジョン・P・マイヤーに言及する。とりわけマーカス・ボーグの*Conflict, Holiness, and Politics in the Teachings of Jesus* (1998) に対して厳しい批判を展開する。彼は新約聖書学者がダグラスの学説を十分な検証をせずに受け入れ、祭儀的汚れと道徳的汚れを混同していることを批判する (Klawans 2000: 163)。

しかしE. P.サンダースの*Jesus and Judaism* (1985) を見る限り、クラウンズのこの批判は誤っている。むしろサンダースは罪と汚れを同一のものと捉えないように注意を払っている (Sanders, 1985: 187)。サンダースは、福音書の「罪人」は悪評のある罪人、裏切り者といった人々を指していて、概して汚れた人を指しているわけではないと述べる。汚れた人には神殿に入ることを制限されているのであって、罪があるわけではない。本質的に罪とされるいくつかの清めの法 (例えば血の摂取) が例外とされる。意図的に清めの法を破る者は「罪人」と見なされるが、それは汚

れているからではなく、法に背いたからである。(Sanders 1985: 177-188) なおクラウンズの研究は「罪を追う人」(ἀμαρτωλός) を含むものではない。

まず洗礼者ヨハネの洗礼は、道徳的汚れを清める儀式あるいは贖いの儀式であって、祭儀の意味での清めの儀式ではない<sup>9)</sup>。この洗礼はすでに回心した者に対して執り行われた。

次にイエスは、クラウンズによれば、(ラビたちのように) 祭儀的汚れと道徳的汚れを明確に分けていたわけではないが、(クムランのように) 混同していたわけでもなかった。マルコによる福音書7章15節でイエスは、「外から人間の中に入って来て彼を穢すことの出来るものは何もない。むしろその人間から出て行く [もろもろの] ものが、その人間を穢すのだ」(岩波訳) と述べている。続くマルコによる福音書7章20-23節 (参照: マタイによる福音書15章19節) の「人から出てくるもの」で人を汚すもののリストは、古代ユダヤ教が道徳的汚れとして挙げているものと重なっている<sup>10)</sup>。従ってクラウンズは、ダンの理論に大きく依拠しながら、イエ

9) マルコ1: 4でヨハネは、「罪の赦しのための回心のバプテスマ」(βάπτισμα μετανοίας εἰς ἄφεσιν ἁμαρτιῶν) を勧めている。またヨセフス『古代誌』18: 117には、ヨハネは「魂から罪を取り除いたもの」(ἄτε δὴ καὶ ψυχῆς δικαιοσύνην προσκεκαθαρμένης) に対して、身体的清め (ἀγνεία τοῦ σώματος) であるバプテスマを執り行ったとある。

10) 殺人や性的罪はヘブライ語聖書にも挙げられている。ただし、このリストには偶像崇拜が欠けている。詐欺や悪口はタンナイームの文学などにおいて、罪としてあげられる。「盗み」「悪い思い」は、古代ユダヤ教には見られない新しい罪である。

すが、祭儀的清めを保つことよりも、道徳的清めを保つことを優先事項としたと主張する (Klawans 2000: 149)<sup>11)</sup>。イエスは、罪を祭儀的汚れの源とするクムランとは違って、罪の道徳的汚れに関心を持つ。

最後にパウロは、ヨハネと同じ様に、洗礼を道徳的汚れからの清めを有効にする贖いの儀礼と捉える。またイエスと同じ様に、パウロは祭儀的清さを保つことよりも道徳的清さを保つことに関心を寄せた。パウロと小アジアの教会にとって唯一問題となった祭儀的汚れは、異邦人と食卓を共有することである (ガラテヤ2章、使徒言行録15章)。しかし当時のユダヤ人が皆異邦人を祭儀的汚れの源として見ていたとは言い切れない。また、たとえユダヤ人がそう見ていたとしても、異邦人と交わることは避けなければならない罪ではなかった。

他方パウロは、しばしば偶像崇拝や性的罪といった信徒が回避しなければならない罪を「汚れ」(ἀκαθαρσία)と呼んだ (ローマ1: 21-25; 6: 19; ガラ5: 12-20)。パウロは罪を祭儀的汚れとは考えていないが、共同体の完全性を保つために道徳的汚れを負う者を共同体から排除するように指示した (1コリ5: 1-13; 2コリ6: 14-7: 1)。

11) このクラワンスのテーゼはJ. D. G. ダンのテーゼに則ったものである。すなわち、ダン「AではなくBである」とイエスが言った時、それは「AではなくBだ」という意味ではなく「AよりもBが重要である」という意味であると主張する。例えば「わたしは義人ではなく罪人のために来た」も、「義人は招かれていない」という意味ではなく、義人よりも罪人を優先するということになる (Dunn 1990: 51)。

クラワンスは汚れを罪のメタファーとするニューズナー説を批判する。この点については議論の余地が残る。エゼキエル36: 16-25にはイスラエルの罪を生理中の女性の祭儀的汚れに引き合いに出し、イスラエルの赦しを神が清めの水をかけることと例える。クラワンスはこのテキストを「メタファー的」とは別の言葉で言い表そうとする (Klawans 2000: 30-36)。なぜなら、彼によると、こう言った表現をメタファーとしてしまうと、イスラエルに対する汚れや清めは実際にはなかったということになってしまうからである (Klawans 2000: 33)。確かに、メタファーと言えば、それは実際にはないものを指しているように取れるかもしれない。しかし、メタファーという用語は複雑な意味を持つ言葉であって、必ずしも実際に起きていることとは何の関わりもないとは言い切れない。また、道徳的汚れをメタファーではないとするならば、どこから神聖法典が、清めに関する言葉を罪と結びつけて用いるようになったのか明らかになれないままになってしまう。

そもそも「メタファー的」(それに対立する『文字通り』)というカテゴリーは、現代の読者がそのテキストを解釈するに際にあてはめるものであって、その当時の人々が汚れを罪とどう結びつけていたかを十分に明らかにするものではない。クラワンスが「メタファー的」という言葉を使う代わりに用いる「祭儀的」「道徳的」区分も、現代のものであって当時のものではない。言い換えると、「メタファー的」「文字通りの」といった区分は(そして『祭儀的』『道徳的』といった区分も)は、波平が汚れを解釈概念と同定するのと同様に、解釈概念である。

本稿は清めと汚れをめぐる初期ユダヤ教の

領域における研究史を要約することが主要な目的であったので、新約聖書のテキストを実際に挙げていない。しかし今後、新約聖書において罪および罪人に言及するテキストにおいてクラウンズの（祭儀的汚れと道徳的汚れの）2分法が通用するのかどうか検証する必要がある。

## むすび

ダグラスが *Purity and Danger* において示した清めと汚れに関する解釈は、旧約聖書、初期ユダヤ文献、新約聖書の研究において批判的に用いられる。本稿ではとりわけニューズナーとクラウンズに注目した。両者は古代ユダヤ教（旧約聖書時代～ラビ的ユダヤ教）における汚れの本質が何かについては大きく扱うことはない。むしろ両者は汚れと罪の関係について着目する。ニューズナーは汚れを罪のメタファーとする。それに対してクラウンズは祭儀的汚れと道徳的汚れを分けて扱う。しかしクラウンズも明らかにしていることであるが、クムランのセクトはこの両者を混合しているし、アレクサンドリアのフィロンの様に祭儀的汚れと道徳的汚れのアナロジカルでアレゴリカルな関係を明らかにしようとしている。このように祭儀的汚れと道徳的汚れの関係は、時代やセクトによって多様である。新約聖書において祭儀的汚れと道徳的汚れがどのような関係にあるのか、そもそも両者は明確に分けて用いられているのかが今後検討されなければならない。

## 引用文献

- Douglas, Mary, [1966] 2002, *Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo*, New York: Routledge. (= [1966] 2009, 塚本利明訳『汚穢と禁忌』[ちくま学芸文庫] 筑摩書房.)
- Douglas, Mary, 1999, *Leviticus as Literature*, Oxford University Press.
- Dunn, James D. G., 1990, *Jesus, Paul, and the Law: Studies in Mark and Galatians*, Louisville: Westminster John Knox.
- Eilberg-Schwartz, Howard, 1990, *The Savage in Judaism: Anthropology of Israelite Religion and Ancient Judaism*, Bloomington; Indianapolis: Indiana University Press.
- Kazen, Thomas, 2002, *Jesus and Purity Halakhah: Was Jesus Indifferent to Impurity?* Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- Klawans Jonathan, 2000, *Impurity and Sin in Ancient Judaism*, Oxford; New York: Oxford University Press.
- Klawans, Jonathan, 2003, "REVIEW ESSAY: Rethinking Leviticus and Rereading Purity and Danger," *AJS Review*, 27(1): 89–101.
- Neusner, Jacob, 1973, *The Idea of Purity in Ancient Judaism* (The Haskell Lectures, 1972–73), Leiden: Brill.
- Sanders, E. P., 1985, *Jesus and Judaism*, Philadelphia: Fortress.
- 小谷汪之, 1999, 『汚れと規範 賤民差別の歴史的な文脈』明石書店.
- 関根康正, 1995, 『ケガレの人類学 南インド・ハリジャンの生活世界』東京大学出版会.
- 波平恵美子, [1985] 2009, 『ケガレ』(講談社学術文庫) 講談社.